

# 9 体 育 科

今村昌禎・須山博充

## 1 研究テーマについて

### (1) 「自立に向かう子どもたち」の姿 <キーワード：こだわり・かかわり・広がり>

体育の授業や日々の生活の中で、自立していると考えられる姿を次のように想定した。

- 感性や情操を生かしながら、受け身ではなく、運動にこだわりをもって（没頭して）取り組み、主体的に課題を追求している姿。（運動へのこだわり）
- 友だちの演技や動きに声援や励ましを送ったり、相手との話し合いの中で、問題や課題を解決したりして、共に高まり合おうとしている姿。（友だちとのかかわり）
- 学習した事柄を生活スポーツとして、ふだんの暮らしの中に、積極的に生かしている姿。（生活への広がり）

### (2) サブテーマ「自分（たち）で決める場を大切に」のとらえ

「自分（たち）で決める」という言葉には、人任せではない、主体的に物事にかかわろうとする意味が含まれている。運動を手順どおり、指示どおりにこなして、ただ技術を身につけるだけでなく、自分（たち）なりに納得して手順を踏んだ取り組みを行ったり、自分（たち）の発想で運動にかかわっていったりということが考えられる。

そこで、体育科の学習において、児童が「自分（たち）で決める」場を次のように考えた。

- ◎ 自分（たち）のめあてを決める。
  - 自分（たち）の活動内容を決める。
  - 自分（たち）の活動する場を決める。
  - 自分（たち）の課題解決方法を決める。
- } 自分（たち）の学習をふりかえる

注) これら4つの自己決定の場をいつも学習過程の中に位置づけるというのではない。単元の特性や学年（運動経験）、個々のめあてのもち方によっては、2つや3つの場合もあり得る。但し、このような自己決定を児童自らが行っていくためには、どの運動にしる、自分のやりたいこと、達成したいことなど、すなわちめあてをはっきりとをもって運動に取り組む姿勢が大切であると考え、「自分（たち）のめあてを決める」場を◎とした。

## 2 自立に向かう子どもを育てる体育科学習

### (1) 基本的な考え

体育は、運動技術の習得や運動の楽しみ方を享受する上で、人間関係が大きく左右する教科である。グループやチームの人間関係によって、運動の特性に関係なく、好きになったり、嫌いになったりもする。つまり、肯定的に捉えると、運動を通して、より望ましい人間関係を構築することのできる教科であるといえる。また、生涯にわたって、運動・スポーツにかかわり、より豊かで健康的な生活を築いていくための基礎を培うという社会的役割を担っている教科でもある。それを自負して教科学習にあたりたい。その考えのもと、次の点を大切にしたい。

#### ① スポーツヒューマニティ（スポーツを通して育まれる豊かな人間性）を育む

競争スポーツが生活文化として確立するには、相手をうち負かすところに意味がおかれるのではなく、勝者も敗者も、強者も弱者も互いに認め合い、しかも、それぞれのよいところや個性を存分に発揮し、高め合うことの意味や価値をみんなに共有されることが必要であると考え。「人を思い

やる気持ち」,「互いを認め合う気持ち」を根底にした自己実現のあり方を追求していきたい。

## ② 学び方の習得（自己教育力を育む）を図る

生涯体育・スポーツの実践力は、子どもが主体的に運動に取り組む中で、真に育まれると考える。子どもがこだわりをもって運動に取り組み、実感を伴って納得するという過程が重視されるべきであろう。また、ひとりひとりがこだわりをもって取り組むためには、めあてが内発的に動機づけられるほうが望ましい。学び方を習得していくことは、学んだことを生活に生かそうとする能力として、必要不可欠ではないかと考える。

### (2) 授業づくりにおける教師の働きかけ

#### ① 運動との出会わせ方

子どもの実態を把握し、子どもの願い・欲求を満たすという側面を大切にしながら、教師が教えたいこと・気づかせたい価値に結びつけて、授業の方向づけを図る。

#### ② 学習課題の設定

多様でオリジナルな考えや方法、望ましい態度が導けるような共通の学習課題を設定する。

#### ③ 自己決定できる場や課題解決のための活動時間の保障

自分にとって、何が、どれが効果的なのか、自分の体で試して納得する授業過程を設定する。また、ある程度運動の仕組みやゲームの方法がわかったら、自分なりに考えた方法（「運動づくり」・「ルールづくり」）を試す場や課題解決のための活動時間を保障する。

#### ④ 学び合い、高まり合う集団づくり

学習材に応じたグループを組織したり、チームを編成したりする。

個のよさを認め合い、互いを思いやれる集団の雰囲気づくりに努める。

#### ⑤ 個人内でのび、集団内のかかわりをみとる評価

「できばえ」に対する評価を「自己実現」という視点から行い、昨日の自分より今日の自分というように、個人の中での向上に喜びを感じることができるよう働きかけを行う。

集団（チームやグループ）内のかかわりが、成果としてみとれる評価を工夫する。